B 4

# 小学校高学年児の家族における父親の子育て参与（第1報）

大阪教育大　○大谷直美　木田淳子

目的　今日、父親の子育て参与の拡大を求める声は、現代の子供達の問題状況の克服という意味からも、又、家庭生活における夫婦の協力という意味からもますます強まっている。しかし、父親の子育て参与に関する総合的・実証的研究は、これまでのところ必ずしも十分とは言えない。そこで、本研究は、小学校高学年児の家族における父親の子育て参与に関する総合的研究の第一報として、父親の子育て参与の実態を明らかにすること、父親の子育て参与が父子紐帯にいかなる影響・関連を有するかを、父と子、双方の視点から明らかにすることを目的としている。

方法　大阪府下、雇用労働者家族が密集しているN市の5つの小学校の5・6年生とその父母を対象に、質問紙法に基づく自記式悉皆調査を実施した。実施期間は1989年10月下旬から11月上旬にかけてである。調査票は、父用・母用・子供用の三種類を一組とし、各学校を通して配布、回収した。配布数は1696組、そのうち父用・母用・子供用が共に記入されているものを有効票とし、有効回収票1381組を得た。有効回収率は81.4％である。

結果　父子の接触頻度は、母子のそれと比べ全般的に低い。又、子供の性別によって父子の接触内容に差が見られる。父子間の接触頻度、子供の生活に対する父親の認知度、子育てへの積極的姿勢等は、父子紐帯の強度と関連し、強い父子紐帯を認知している子供には、父親を立派だと思っている率が高い。又、強い父子紐帯を認知している父親には子育てを通して、父親自身が豊かに力強く生きる力を得ている者が多い。